

派遣者番号	30K05	氏名	中村 理依子
研究主題 —副主題—	若手教諭の学級経営を支援する学年会の機能に関する一考察		
派遣先	帝京大学教職大学院	担当教官	中田 正弘
所属校	板橋区立加賀小学校	校長	大嶋 美弘

キーワード： 学年会 学級経営 若手教諭の育成

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

本研究の目的は、小学校における学年会に焦点を当て、その役割や課題を明らかにするとともに、若手教員の支援という視点からその機能を見直す。その上で若手教員を支援する機能を発揮した学年会の在り方を実証的に検証する。

今日の教育を取り巻く環境には、学級崩壊、不登校やいじめ問題など様々な課題が指摘されている。

中央教育審議会(2015)「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」では、各学校の自主性・自律性の確立と自らの責任と判断による創意工夫を凝らした特色ある学校づくりの実現のためには、人事や予算、教育課程の編成に関する学校の裁量権限を拡大するなどの改革が必要であると提案されている。この実現のためには、教員一人一人が、もてる能力を最大限に発揮し、組織的、一体的に教育課題に取り組める体制をつくる必要がある。

こうした中、中田(2017)は、新人教員たちが、どのような戸惑いに直面し、その戸惑いに対してどのような解決方法をとっているかを検討している。この調査は、出合った困難とともに、どのような解決方法が有効であったかを尋ねており、そこでは、多くの初任者が「先輩教員に相談する」という方法であった。いわゆる学年主任等の存在である。

こうした背景も踏まえ、若手教員の日常の教育活動の母体となる学年会について検討し、若手教員を支援する学年会の機能について考察することを目的に研究を進める。

具体的には、学年主任を対象に、学年会の内容や配慮点、困難時の対応などについて質問紙調査を行い、さらに分析結果に基づいて、インタビュー調査を実施する。その上で若手教員を支援する学年会を実践し検証する。

2 研究の内容・研究の方法

研究の目的にアプローチするために、四つの課題に取り組む。

- (1)学年会の機能と若手教員支援の先行研究の整理
- (2)A区小学校の学年主任を対象とした学年会に関する実態調査
- (3)若手教員を支援する学年会機能の検討と実践
- (4)学年会を母体とした若手教員の支援方法の提案

先行研究では、学年会の機能を教師同士の「学び合いの場」として、学年主任などの熟練教員が、自分自身の経験をもとに指導法のアドバイスをを行っていることを明らかにしている。しかし、学年間でどこまで共通理解をし、それぞれの教員の経験等を生かした効果的な「学年会」が運営されていないことや「学年会」で学んだことが、安定した学級経営へつながっていないことが課題になっている¹⁾。

・「学年主任からみた学年会に関する調査の実施」

東京都A区公立小学校51校の学年主任を対象に、アンケート調査を実施した。

質問紙調査(フェイスシートほか計37問：選択式4件法と自由記述式併用)を行った。結果。回収数203通(回収率:66.3%)、有効回答数は189通であった。

調査内容は学年会の機能に関する項目として4件法で尋ねた。

- I 「学年会で取り組んでいる内容」
- II 「学年主任として留意していること」
- III 「学年内で困難があった場合の対応」
- IV 「学年主任としての今の状況について」

3 研究の結果

・質問紙調査結果

学年会の内容としては、「学校行事や集会活動の実施に向けた相談」「課題が生じた場合は、管理職に報告・相談するようにしてい

る」などの項目が高かった。一方で質問項目Ⅱの「それぞれの教員の振り返りの時間を大切にしている」などを重視している回答もみられ、重回帰分析を行った結果、教材や指導方法の共有などと有意な関係にあり、学年の足並みをそろえることよりもそれぞれの課題に応じた力量形成等を重視している傾向がうかがえた。そこで、この点に着目し、インタビュー調査を実施した。

・インタビュー調査の結果

調査の結果から以下の3点を見いだすことができた。(11学年の学年主任に実施)

【学年会の位置付け】

- ・一日の振り返りの場
- ・教員個々の安心感につながる癒しの場
- ・同僚性の向上の場

【学年会の内容】

- ・経験等に基づく役割分担と責任の明確化
- ・日常の課題等に関する交流・共有
- ・具体的な支援方法・指導方法等の検討

【学年会の留意点】

- ・調整機能の発揮
- ・学年教員間のコミュニケーションの重視
- ・互いの経験や強みを生かす

インタビューを実施した教員が担当する学級がすべて安定しているというわけではないが、常に課題を共有し改善に向けて取り組むという機能を発揮しており若手教員も安心感をもって職務に臨んでいる実態があった。

4 研究の考察

先行研究と実態調査の分析結果から、以下の2点を仮説とした。

(1)若手教員の「強み」²⁾を学年主任も若手教員自身も自覚し一人一人が責任ある役割分担をすることで、若手教員の安定した指導・児童支援が可能になるのではないかと。

(2)目指す児童像を学年内で共有するとともに学年会では、各自の取り組みを振り返る時間を確保することで若手教員の効力感を高め学年会が有効的に機能するのではないかと。

若手教員を支援した学年会の実践を行うにあたり『構成メンバーの良さや強みの共有』『目指す児童像の設定』『構成メンバーの強みを生かした役割分担』『行事に向けた指導方法の共有』『児童の変容についての振り返り』『行事を通じた学年会の機能の振り返り』という流

れで行った。実践に当たっては、アクション・リサーチ型リフレクションの手法を導入した³⁾。

・実践を通して見いだした学年会の機能

若手教員の「強み」を学年主任も若手教員自身も自覚し一人一人が責任ある役割分担をしたことで、若手教員の充足感と信頼感の向上へつながった。例えば若手教員から「自分の学年は、協力して良い学年だな。」などの語りが出るなど、学年会への効力感が向上した。また、行事を学年メンバーで創造して実践していくことが協働的な学びの場となることが示唆された。その場合も、学年内での振り返りの対話が必要になることが明らかになった。

役割分担に留まらず取組の過程や成果を振り返ることを通じて責任と自信をもって職務に取り組むことが明らかになった。

5 今後の展望

本研究を通じ、以下の成果・課題が明らかになった。

【成果】

- (1)若手教員の「強み」を学年主任も若手教員自身も自覚し責任ある役割分担をしたことが、学年会として若手教員の支援につながることを確認できた。
- (2)目指す児童像を学年内で共有し、協働的にその実現を目指すことで学年会の話合いや学び合いが活発になりそのことが構成メンバーの安定的な学級経営を支援することにつながった。

【課題】

本研究では、実践した2学年とも2学級の小さな学年会であったため研究成果には限定がある。今後、実証的な研究を積み上げていく必要がある。さらに、働き方改革と関連付けた学年会の在り方も検討する必要がある。

註

1)道津未来(2012)「北条小学校のプラン検証システムを支える学年会の機能」人間科学研究P.135ほか

2)坂田哲人、中田正弘、村井尚子、矢野博之、山辺恵理子(2019)『リフレクション入門』学文社、pp.23-27。コルトハーヘンは「強み」をコア・クオリティと呼び、山辺によれば、それは「やさしい」「頼りがいがある」「強い信念を持っている」など無数にあるという。

3)同上書、pp.54-61。中田はコルトハーヘンの5段階の手順等を参考に開発している。

